

## 「I was born」の授業

## 第1回〈全5回〉

渡辺 良光

### 前書き

一人の国語教師が、教員生活を終えて十年近く経って〈何か〉残したいという欲求のもと、この文章を書いている。

若い頃、〈詩〉は難解で、ほとんど授業で取り上げなかった。私が群馬高教組の組合員となったのは、1980年3月、新任の年度の最後の月であった。その翌年度か翌々年度、分会に勧められ、榛名の「ゆうすげ山荘」で行われた〈県教研〉に参加した。その冒頭、全参加者を前に、童謡の「ぞうさん」を教材にして、見事な模範授業を披露してくれた先輩組合員がいた。あの短かな〈詩〉を分析し、その間に、子どもの純真さゆえの残酷さもあぶり出し、主題である「みんなお母さんと似ていて、お母さんが好きだ」というまとめは、新任とっていい私には、〈神〉のように感じられた。

しかし、私は〈詩〉を授業に取り上げなかった。勤務校が大学受験を生徒に目指させようという「進学希望校」だったからだ。大学受験にほぼ〈詩〉は取り扱われない。論理的文章と古文——それも文法に特化した——授業ばかりしていた。

6年目に実業高校へ転勤になり、それまでの生徒との学力格差と、教員の意識格差に愕然とした。生徒は、基本的な国語の用語——主語、述語、指示語、文章、文、文節、単語、等——が身につけていない。教員は、普通教科——座学といわれる——の指導より、生活指導に重きを置いている。転勤して2、3年、私は国語教師として何をしてきたのか分からない。

3、4年後、ふと「ぞうさん」の授業を

試してみた。生徒の反応に「手応え」を感じた。「ぞうさん」は、あくまで〈詩〉の導入の授業だった。〈詩〉という単元を、1時間で終えるわけにはいかない。そこで、学校図書館で見つけた、茨木のり子著岩波ジュニア新書『詩のこころを読む』から、この「I was born」を含む2、3編の〈詩〉をコピーして紹介し、茨木さんの「解説」を付け加えて、〈詩〉の授業を終わりとした。自分ながら情けなかった。しかし、良い〈詩〉の持つ力なのであろうか、無能な国語教師の言い訳なのか、良い〈文学作品〉は、それを生徒に示すだけでも、教育的価値があると私には信じられた。

ここで終わればいいのだが、国語教師としての見栄や意地といったものが、紹介だけだったはずの〈詩〉を、「分析」し始めてしまった。私の拙い授業の一端を、見ていただきたい。

『詩のこころを読む』より、「引用」させてもらう。

### I was born

吉野 弘

確か 英語を習い始めて間もない頃だ。

或る夏の宵。父と一緒に寺の境内を歩いてゆくと 青い夕靄の奥から浮き出るように、白い女がこちらへやってくる。物憂げに ゆっくりと。

女は身重らしかった。父に気兼ねをしな

がらも僕は女の腹から眼を離さなかった。頭を下にした胎児の柔軟なうごめきを腹のあたりに連想しそれがやがて世に生まれ出ることの不思議に打たれていた。

女はゆき過ぎた。

少年の思いは飛躍しやすい。その時僕は<生まれる>ということがまさしく<受身>である訳をふと諒解した。僕は興奮して父に話しかけた。

—やっぱり I was born なんだね—  
父は怪訝そうに僕の顔をのぞきこんだ。僕は繰り返した。

—I was born さ。受身形だよ。正しく言うと人間は生まれさせられるんだ。自分の意志ではないんだね—

その時どんな驚きで父は息子の言葉を聞いたか。僕の表情が単に無邪気として父の眼にうつり得たか。それを察するには僕はまだ余りに幼かった。僕にとってこの事は文法上の単純な発見に過ぎなかったのだから。

父は無言で暫く歩いた後思いがけない話をした。

— 蜚蜚という虫はね。生まれてから二、三日で死ぬんだそうだがそれなら一体何の為に世の中へ出てくるのかとそんな事がひどく気になった頃があっただね—

僕は父を見た。父は続けた。

—友人にその話をしたら或日、これが蜚蜚の雌だといって拡大鏡で見せてくれた。説明によると口は全く退化して食物を摂るに適しない。胃の腑を開いても入っているのは空気ばかり。見ると、その通りなんだ。ところが卵だけは腹の中にぎっしり充満していてほっそり

した胸の方にまで及んでいる。それはまるで目まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが咽喉もとまでこみあげているように見えるのだ。つめたい光りの粒々だったね。私が友人の方を振り向いて<卵>というと彼も肯いて答えた。<せつなげだね>。そんなことがあってから間もなくのことだったんだよ。お母さんがお前を生み落としてすぐに死なれたのは—。

父の話のそれからあとはもう覚えていない。ただひとつ痛みのように切なく僕の脳裡に灼きついたものがあった。

—ほっそりした母の胸の方まで息苦しくふさいでいた白い僕の肉体—

— 詩集『消息』

はじめに教師が音読し、「初発の感想」を聞いてみる。「よかった」「分かった」という感想が出て、それを無視し、せっかくの<詩>をずたずたに分析し、分かりにくいものにしていく。

発問 I 『或る夏の宵』とはいつか？根拠を示して答えよ。

大抵の生徒が、「根拠」におじけづいて答えられない。そこで、補足の発問①「みんなが『英語を習い始め』たのは、いつ頃か？」問いかける。ほぼ間違いなく、「中学生」と答えが返ってくる。たて続けに、補足の発問②「この詩の中の『僕』は、何年生だ？」と問いかける。「1年生」という答えが多い場合、補足の発問③「英語で『受身形』を習ったのはいつか？」を問う。だいたい「2年生」「3年生」が出てくる。厳密な『僕』の年齢特定は必要ないので、「だいたい中2か中3」頃の『夏の宵』で済みます。

こんな調子で始まる。

(つづく)